アーティストインタビュー
本田椋さん

—本田さんの年表をちょっと、細かく聞いていきたいなと思って。生まれた時から今日に至るまでのことを細かく聞きたいなと思っています。幼少期のどんなお子さんだったのかなっていうのは気になりますので、何か思い出す出来事だったり、家族からこんな子とだったよみたいなの言われて覚えてるのあれば、教えてください。

本田：生まれは、新潟県の長岡というところで。で、育ちはほとんど新潟市なんですけど。1990 年 9 月 17 日 18 時 3 分に生まれました。で、双子なんですよ。双子の兄がいて。兄は 1 分先にこの世に出てきたんですけど。双子で育ってきて。ちっちゃい頃は、兄と比べて少し病気があったので、よく病院に通ってたりしてたんですけど、なんか大事に育ててくれて。兄と比較されることが多かったのかな、今思うと。今振り返ってみると。兄と比べて、だいぶ、なんだろう、お兄ちゃん割と堅実なタイプなんですけど、僕はフラフラと、寄り道して帰ってきちゃうみたいな感じで。よく母は、「お兄ちゃんは石橋を叩いて渡るタイプだけど、椋は石橋をダッシュで渡るタイプだよね」って言われて育ちましたね。で、小中高まではずっと新潟で育って、大学進学と共に仙台に来て。

小中高はずっと、野球とか水泳とか陸上とかテニスとか、スポーツをやっていて。文化系の活動って割と興味がなかったんですけど、大学入る直前に NHK の舞台を配信してる番組を観るようになって、面白そうだなあと思って、大学に入ったらやってみようっていうので、大学入学したその日に、入学式の日に演劇部を見に行って。そしたらすごい 40 人ぐらいのちっちゃいキャパシティの、劇場っていうよりはプレハブ小屋みたいなところで、何やってたんだ、つかこうへいの芝居だったかな。すごい近い距離で、もうここに役者さんがいるみたいな感じで。唾を浴びながら観るみたいなのを観て、こんな世界があるんだと思って、すごいお芝居にのめり込んでいって。で、今だにやってるっていう感じですね。細かさ的に大丈夫ですか、年表。こんな感じで。

—ありがとうございます。小中高の本田さんも詳しく聴きたいなと思ったんですけども。幼少期の頃から比べて、何か性格的には変わったりとか、環境が変わ

ったりとか、そういう、何か今の自分につながるような出来事とかってありましたか？

本田：僕、特殊な家庭環境だなと思うところが１個あって。ちっちゃい頃は、兄と一緒に、日曜日になると父に隠れて教会に連れて行かれるっていう、なんか家庭内キリシタン生活みたいなのを送っていて。すごい面白い環境でしたね。だから、宣教師の外国の方とか、平日来ていろいろ教えてくれたりとか、一緒にゲームしたりとかしてくれるんですよ。で、いろんな海外の人と出会う機会はちっちゃい頃からあって、それはすごく、今いい体験だったなと思ってるんですけど。なので。ただ、母が、中学、高校ぐらいかな、からだいぶ考え方が変わってきたみたいで。教会から距離を置くようになって。で、母自身の信仰というか、考えも変わってきて、また別の考えになってきて。その時に、だからちっちゃい頃から信じさせられてきたものが、え、母はなんか考え変えたぞみたいな、すごく揺らぐっていう感じがあって。

以降、特に何か信仰したりとか、宗教団体に入ったりとかしたわけじゃないんですけど、宗教って何なんだろうとか、信仰って何なんだろうとか、神とか仏ってどういうものなんだろうっていうところは、すごくなんか興味はあって。それは、今、舞台やってる中でもよく考えることかなという気はしますね。小中高。でもすごい、小学校の頃は、低学年まではだいぶ問題児だったと思いますね。よく漢字練習の時間におちんちんを出して。机の上からジャンプしてた記憶があります（笑）。使えないことばっかりで大丈夫ですかね。

でも中学校になって、担任の先生が変わって、すごくいい先生だったんで、真面目に勉強したりとか、真面目に授業を受けるようになって、そっからはなんか割と優等生の位置でやってきましたね。

どうですか？　小中高、ほかに。こんな感じで大丈夫ですか？

—友人関係とか、コミュニケーション面ではどうでしたか？　さっきのご家庭の話もしていただいたんですけども、そういうの外に出すタイプなのか、自分の中で秘めているタイプなのか。あと友だちの中での立ち位置とか、そういうのが分かると、本田さんのなんとなく雰囲気も分かるかなって勝手に思って。

本田：友だちとはもう、小学校の頃とか毎日遊んでましたね。家が社宅、父がJR

で働いていて祖父は国鉄だったんですけど。JR の社宅に住んでたので、同じ JR の子どもたちもそこに住んでるので。社宅のほうに公園もあったりして、もう帰宅時間ギリギリまで遊べる環境が整っていたので、よく特定のメンバーで遊んでましたね。双子なんですけど、若干交友関係は違くて、双子って必ず別のクラスに入れられちゃうので。友だちがちょっと変わってくるんですよね。なので一緒に遊ぶ時もあったんですけど、また別のメンバーで遊んでたりとか、兄のグループに僕が行ったりとか、逆に兄が僕のグループに来たりとかもしてたんですけど。いろいろ。あとロシア人の子が、新潟にお父さんの仕事で来てたんですかね。でいて、よく一緒に遊んでましたね。ロシア人の子と缶蹴りして。彼も行ったり来たりだったんですけど、ロシアと日本を。中学ぐらいまでは見かけてましたね。その後どうなったのか分からないんですけど。友だちの中での立ち位置は、割と学級委員とか、なんか副委員長、委員長みたいなことをやりたがるポジション、やりたがっていたので、ちっちゃい頃。割と中心的な、クラスの中とかでも位置にいたのかなって思いますね。

中学、高校はもう部活漬けでしたね。部活がすごい楽しくて。遊ぶメンバーも、部活の仲間たちと。しかも、部活テニス部だったんですけど、テニス部の練習がない日も友だちと一緒にテニスコートに行って、自分たちで借りて練習してましたね。朝練して昼練して、で、放課後も練習してみたいな。

—ありがとうございます。先ほど、NHK の番組を観ていてということだったんですけども、たまたま観られた感じですか、それとも勧められたりとか、興味が何か引っかかるとこがあったのかなと思って、気になったんですが。

本田：たまたまですね。たまたま。僕、大学入試がアドミッションオフィスだったんですよ。英語入試っていうやつ。なので、12 月 1 日かな、にもう入学が決まっていて。センター試験、今の共通試験の前には合格が決まっちゃってたので、深夜番組を観るようになって。生活リズムがもう狂ってたんですけど。そしたらなんか深夜に舞台を、なんか舞台やってんなあと思って。で、ちらっと観てみたら、すごく感動して、毎週観るようになって、これはやってみたいぞって、初めてそこで、それまで全然、文化的な、文化系の活動に興味なかったんですけど、興味が湧いて、やろうと思ってましたね。

—感動したっていうところが、具体的に何か覚えてるシーンとかありますか？

本田：最初に観たのが、劇団四季の『南十字星』っていう舞台で、戦時中のお話なんですけど。なんかすごく、不条理な、一生懸命誠実に生きてた主人公が、なんだったかな、捕虜にゴボウを食わせたっていうので、木の根っこを食わせるなんて非人道的だみたいなことで戦犯になって。処刑されちゃうのかな。ちょっと詳しく覚えてないんですけど。すごく不条理な出来事によって苦しめられるんだけれども、誠実に、謙虚に一生懸命生きてる人間の姿みたいなところがなんか感じられて、すごく感動したっていうのと、すごく人間ってなんなんだろうとか、この世界ってなんなんだろうってことにとても興味を持っていて。それは父と母の影響もあるんですけど。そもそも、僕、大学、物理学科だったんですけど、物理を選んだのも、この世界ってどういう仕組みでできてるんだろうってことが知りたかったんですよね。で、勉強するはずだったんですけど。舞台を観た時に、もしかしたらそれが舞台っていうものを通して分かるかもしれない。っていうふうに感じたんですよね。それで大学入ったあとは、授業を受けずに舞台ばっかりやってたんですけど。今考えるとね、もうちょっと真剣に勉強しておくべきだったなと思うんですけど。なんかそんなことを舞台に感じて、やってみたいなって思いましたね。

—最初、シアラボさんに入られたってことだったので、少しシアラボさんの時代の経験だったり、活動だったりもお聞かせいただいてもよろしいでしょうか？

本田：シアターラボは、当時、仙台にはなかった考え方とかメソッドを中心にして、作品を作っていくっていうことがすごく新しくて。これ勉強してみたいなと思って参加したんですよね。シアターラボは、山の手事情社の山の手メソッドを元にして、作品を作って。今いろいろ形を変えながらやってるとは思いますけど。新しい作り方を勉強したいと思って参加して。で、いつぐらいまでやってたのかな。それこそ大学を卒業するくらいまでなのかな。しても、卒業後も 2 年ぐらい続けてたのかな。やってたんですけど、少しずつ自分の考えとかやりたいことと、シアターラボが目指してるものが変わってきて。今はミサイルが中心になってしまったんですけど。その時にね、シアターラボは、震災前から高校に行ったりとか、ワークショップだったりアウトリーチを力を入れていたので、それも

非常に面白かった、いい経験させてもらったなと思いますね。三桜高校にも行きましたし。シアラボ、はい。

—ミサイルの旗揚げというか、入ってからの話を詳しく聞いてもよろしでしょうか？

本田：ミサイルは、旗揚げの時は、高橋裕子舞踊団さん、ガス局のほうにあるバレエスタジオ、高架下にあるバレエスタジオで。当時、劇場が使えなかったので、震災の影響で。お借りして、C.T.T.sendai のつながりで、C.T.T.nagoya も、アーティストさんとかも来ていただいて。試すほうじゃなく、支えるほうの支援会ってことにして、作品を上演して、集まったおカネをカンパしようっていうのでやったんですよね。で、その以降も、震災つながりで、いろんなところに、うちのフェスティバルに出てみないとか、いろんな、「来て、見て、あるくと。」もそうですけど、いろんな呼びかけがあって。で、当時は声かけられたら絶対に行くみたいな感じで、条件のこととかを一切気にせず。発足して数年はそんな感じでやってた気がしますね。もう 1,000 円、2,000 円でもいいし、ただでもいいから、とにかく行くんだっていうのでやってて。名古屋に行ったり、京都に行ったり、東京に行ったり。それこそミサイルのように。飛んでなかったですけどね、あんまり。どっちかっていうと、車で、地べたを這いずるように移動してましたけど。短距離走みたいにやってましたね。それこそ本当に。めちゃくちゃなスケジュールで。朝まで美術作って徹夜で本番してとか、そんなんばっかりでしたね。

—最後に、今後のミサイルの目標だったり、本田さん個人の、今後の演劇活動の目標をおしえていただいてもよろしいでしょうか？

本田：ミサイルとしては、さっき言ったような、しっかりプロとして自立した集団になって、東北でしかできない作品を世界中に届けていきたいなと思ってます。個人としては、そうですね。いろいろありすぎて困っちゃうな。今日なんかちっちゃい頃の話とかもしたので。それに関連して考えると、なんか小さい頃から、ロシア人の幼なじみだったりとか、いろんな外国の方とかとゲームしたりとか、すごく楽しかったなって記憶があって。なんか世界中のいろんな人と一緒に作品を作ったり、いろんなとこに行って作品を上演したいなっていう気持ちは、

すごく個人的に、夢としては持っていて。なんか世界中を飛び回って、舞台をやっている、やれたらいいなって思ってます。ミサイルも、ブロードウェイに行きたいと思っています。ミサイルブロードウェイ、良くないですか？　みちのくブロードウェイ、ふんどしとかね。蘇民祭みたいな感じで。世界中に東北をアピールしていきたいなって。世界中から愛される東北、仙台という町に、ミサイルがしていけたらなって思ってます。

—ありがとうございます。